

---

# 俺は友達が出来ない!!

有希のなく頃に

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺は友達が出来ない！！

### 【Nコード】

N9445U

### 【作者名】

有希のなく頃に

### 【あらすじ】

親父が極道、自身も巨体で武術の達人だけど美少女ゲーム大好きな仲里優作。

それでも、小、中学校では友達が出来たが、高校になってから友達ができないです！！

そんな優作が出会ったのが……

## プロローグ

俺は友達が出来ない！！

……いやいきなりそんな言葉で始めるなよって思う人が居るかもしれないが、いやマジで友達が出来ないのよ高校に進学してからさ。

小、中学校では友達が出来たんだけど、高校に進学してから全く友達が出来ない！！

やっぱり公立に進学すれば良かったかな……私立の方が面白そうなんて思うんじゃない……

あ、ゴメンゴメン愚痴っぽくなっちゃったね、俺が友達が出来ないのは別にコミュニケーション能力が低いんじゃない、小、中学校では友達出来たから。

多分友達が出来ないのは俺の風貌にある。

身長186cm、体重89?の巨体、柔道黒帯、合気道六段、剣道五段、古武術師範代などの武術の達人、さらには親父はヤクザで菅原?太みたいな極道の人、しかも親父の血が流れているから生まれつき顔が極道の人になっている。

そんなんだから友達が出来ない。

特に進学したところが、ノリで決めた聖クロニカ学園というキリスト教のミッションスクールだからみんな気が弱いからもう誰も話かけてくれない。

えっ？じゃあなんでそんなんで小、中学校では友達が出来たって？それは俺の趣味が関係している。

俺の趣味はアニメ、マンガ鑑賞とライトノベルを読むこと、ゲーム（エロゲも含む）をやるつまり趣味がアキバ系だ。

それが広まるとみんなそのギャップに驚いて少しずつ話かけて来て後は自然に友達になっていった。

基本オープンにしていた事が良かったようだ。

ちなみに親父はこの趣味を知っている。

親父曰わく

「漢ならば好きであるなら堂々と胸を張れ！！」

そう言われたからオープンにしている。

しかし、しかしここでは友達が出来ない。

まず基本的に人が俺の半径3mに寄って来ない、みんな離れている、

しかも俺を見ようとしなない。

ライトノベルはカバーをかけていないから気付いた奴は居るだろう  
か話かけて来ない!!!

俺が動けばみんな逃げる。

こんな調子でかれこれ一年一人も友達が出来ていない。

……話していたら悲しくなって来たぞおい!!!

そんな時にあいつらに出会ったんだよ俺は……

## 仲里優作

どうもこんにちの人はこんにちはこんばんはの人はこんばんはおはようの人はおはよう仲里優作という者だ。

現在聖クロニカ学園二年生に在学中あ、ちなみに友達は随時募集中だ。

俺は今、苦痛な英語の授業を受けている……まあ、ほとんどが苦痛の授業なのだが。

あ、別に勉強が苦手なわけではなくそこそこ成績は良い。

問題は俺に現在このクラス……いやこの学校に友達がない事だ。

この学校はやたら授業中のペア活動が多い、英語はもちろん現代文とか……etc. だからばぶられる、真ん中の席に居るのにはぶられる。

だからペアはいつも先生と、たまにペアが先生では無くクラスメートのときがあるがその時相手はめちゃくちや挙動不審になっている。

一回「大丈夫か？」って声をかけたらそいつが漏らした(両方)。

それがあってから声をかけるのは止める事にした、これ以上悪名作

りたくないし。

昼休みもつまらない、理由は簡単友達が居ないからだ。

昼飯は一人で食べる、最初は教室で食っていたが一人だし俺が居ると教室の空気が重くなるので今は学園内の礼拝堂で相談（友達が出来ない事）がてら昼飯を食っている。

放課後ももちろんつまらない、理由友だて（以下略）

基本すぐ帰るか、図書館で勉強するかライトノベルを読むかの生活をしている。

楽しいのは家に帰ってから武術の稽古をするか部屋でエロゲするかラノベ読むかマンガ読むかだ。

そんな毎日である。

しかし、その日は違った。

まあ、放課後になるまでは今までと全く一緒だったのだが……

「我ながらバカだな財布置き忘れるなんて」

昼休みに礼拝堂行った時に財布を置き忘れてしまったので俺は取りに向かっていた。

「まあ、あの部屋マリア先生しか使ってないから盗まれる事は無いと思うが……」

談話室4は現在マリア先生の昼寝の部屋化してるからな……

先生とか言うけどまだ子供だし財布からお金抜くなんてこついな  
いはずだ、まあシスターだし。

「そう言えばマリア先生、何か文句言ってたな……何だっけ？」

今日、昼飯を食べる為にマリア先生に許可貰いに行った時に何かぶつ  
ぶつ文句言ってたっけ？

「確か……隣人部とか言う部の顧問になって談話室4昼寝出来なくな  
った……だっけ？……てか隣人部って何だよ？」

陸上競技部とか硬式野球部とかは名前でどんな部分かるけど隣人部  
って……なにすんだよその部……



「部活か……部活入れれば良かったかな……」

この学校は大らかで文科系の部活が多いのに運動系の部活が少ない、柔道部とか剣道部とかあれば良かったのになあ……

そんな事を考えているうちに談話室4の前に到着していた。

「はあ……今更そんな事言っても意味ないか……てかやっぱり友達欲しいな……」

俺は、そう言いながら談話室4の扉を開けた。

そうして俺は隣人部の扉を開けてしまったのである。

仲里優作（後書き）

そう言えばオリ主の名前公開して無かった。

オリ主  
ながさとゆうまぐ  
仲里優作

プロフィールはプロローグ参照。

妄想CV：未定

ちなみに下の名前優作は故松田優作からです。

## 隣人部入部（前書き）

何かひねりが無いですが隣人部に入ります。

## 隣人部入部

扉を開けるとそこには知らない三人が居た。  
女が二人に男が一人、俺が知らないという事は多分向こうも俺の事を知らないと思う。

「……いやそうじゃなくて!！」

「なに一人で喋っているのだこのデカ物は……」

三人の中の一人、黒髪ストレートの美人だが口が悪い奴が最初に口を開いた。

「デカ物言つな!！」

「見た事ない奴ね……まあ良いわ私の前に跪きなさい!！」

次に口を開いたのは金髪で美少女でやたら胸のデカいが口と性格が悪い奴だった。

「……性格腐ってんなお前」

「えっとあの〜」

「ん!？」

最後に口を開いたのは、髪染めるの失敗したのか半分金髪で半分染まっていない目つきの悪い如何にもヤンキーな男だった。

「意外だなこの学校にヤンキーに居たのか……転校でもして来たか？」

「やっぱりヤンキーに見えるのか俺……でも、あなたには言われたくないですね……」

「なっ、なに!？」

「ふむ、確かに小鷹とお前小鷹はヤンキーだがお前はヤクザだな……」

「同感だわそれ」

黒髪の女と金髪の女がそう言った。

「……まあ、親父ヤクザじゃないけど極道の組長だからな」

俺がそう言うと三人は凍りついた。

「本当にヤクザだったのか……」

「極道とヤクザって一緒じゃないの？」

「マジかよ……」

「まあ俺もヤクザと極道の違いわからないからな」

作者が調べたところ極道とは元は仏教用語で仏教を極めた人のことをさし、後に明治の初め頃、清水次郎長のように義理と人情に生き、弱い人々の為に戦った侠客きやくかくが自分のことを極道者と読んだ事から意味が広がっていき、今では博徒や悪事をする人など悪い人をさす意味になっています。

「ふっ、まあ良い……お前もあのポスターを読んで友達が欲しくて我が隣人部に来たのだな？」

良いのかよ!!と金髪の……ああ小鷹か、小鷹がツツコミを入れたがスルーされていた。

「いや、財布を取りにこの部屋に来たんだが……まあ友達は欲しいな」

「なに、ポスターを読んで来たわけではないのか……」

「ポスター？」

「ああ、掲示板とかに隣人部のポスターを貼ったんだよ、そしたらまず星奈が来てその後あなたが来たからポスター見て来たのかと……」

「ふん、これだー!!」

そう言ってその女はポスターを見せて来た。

「えつとなになに……とにかく臨機応変に隣人とも善き関係を築くべくからだを心を健全に鍛えたびだちのその日まで、共に想い募ら

せ励まし合い皆の信望を集める人間になろう……」

「意味が分かるか？」

「ああ、友達募集か……」

「即答!？」

「簡単だろこんなの……なあ？」

まあ、斜めに読むだけだし暗号としては初級だろ、エニグマを解読するわけではないし。

「ふん、そつだぞ小鷹」

「そつよ小鷹」

「こいつら絶対どっかおかしい……」

小鷹がツッコミを入れていた、ツッコミキャラなのか小鷹は？



……てかこいつらに俺は含まれているのか？

「ふむ、意味が分かったので入部を認めよう！ようこそ隣人部へ！」

「はあ……えっ！！！」

「えっ！！とはなんだ高貴な隣人部に入部を認められたのだぞ喜べ！！！」

「私と同じ部活に入れるのよ！喜びなさい！！蠅刷り周りなさい！！私を神と崇めなさい！！！」

「……まあ、性格はともかく風貌だけならギリシヤ神話とかの女神に出て来そうだな」

「あ、それ同感だな」

あ、前者が俺で後者が小鷹ね。

「まあ、とりあえず入るよ友達欲しいから……」

「そうか、ではとりあえず名前を名乗れ！！デカ物」

「デカ物言っな！！……仲里優作だ」

「ふん、優作か……由来は？田優作からか？」

「お前……せめて敬称をつけろ！！ああ、？田優作さんのように男気のある男になれだからそうだ」

松田優作さん……本当に惜しかったな……もつと長生きして欲しかった……

「ふむ、そっちが名乗ったならこちらも名乗らないとな……三日月夜空だ呼ぶ時は夜空で良い」

「ふん夜空ね……名前と見た目は綺麗なものにな……」

「何か言ったか？」

「いや、なにも」

「じゃあ次は私ね、私の名前は……」

「乳牛で良いぞ優作」

「あんたあー!!……柏崎星奈よ!!あんたも星奈で良いわ」

「柏崎……ああ、柏崎天馬理事長の娘か……分かったよ星奈」

「じゃあ、最後は俺だな……てかもう名前分かってるよな？」

「小鷹だっけ？上は？」

「羽瀬川だけど……」

「了解、あと敬語とかいららないからな小鷹」

「あ、ああ……へへっ」

何だか小鷹の様子が少しおかしかったが、スルーしておく事にした。

まあ、そんなこんなで俺は隣人部に入る事になったのだよ。

隣人部入部（後書き）

もうちょっとひねりたかったけど思い付きませんでした。

## モン狩（前書き）

モン狩の話です。

## モン狩

「やっぱりゲームだと思うのだ」

俺が隣人部に入った次の日唐突に夜空がそう言った。

ちなみに俺と小鷹は本を読んでいて（もちろんラノベ）星奈はと言  
うとティーセット持ち込んで紅茶を飲んでいた。

「やっぱりゲーム？」

「ああ、優作がくる前にそんな話をしていたんだ」

「うむ、やはりゲームだろ高校生でもゲーム好きは多いからな」

「まあ、俺もゲーム好きだけど……主に美少女ゲーしかやらんけ  
ど……」

「最悪ねあんた……」

星奈から侮蔑の視線を向けられた。

「……性格腐ってるお前に言われたくないな……肉」

「につ、肉う!？」

「おお良いなそれ、て事だ肉」

星奈のあだ名「肉」が確定した瞬間だった。

「あんたらあゝ!！」

「ハエにたかられた肉はほつといて、最近きているゲームはこれだ  
!！」

夜空が取り出したのはモン狩だった（モ？ハンじゃ無いよ）。  
モンスター狩人、通称モン狩内容はモン？ンと同じ。

「モン狩か……俺も持ってるなそれ」

「うむ、このゲームは他の奴らと協力して遊ぶ事が出来る。更に仲  
良くなるきっかけが沢山あるのだ！」



「……確かにクラスの男女でやってる奴が居たな」

小鷹も話に乗ってきた。

「うむ、そうだろでは来週の月曜日にやるとしよう、モン狩とPS  
Pを持ってくるのだぞ」

「了解」

「分かった」

「こらあく私を無視したままにするなあ!」

ずっと無視していた星奈がついにキレた。

まあ、俺、夜空に小鷹まで無視してたからな……

「なんだ肉いきなりキレて?」

「そりやずっと無視されてたらキレるわよホント!」

「では、素直に混ぜりたいと言えよ……なあ小鷹？」

「なっ、いきなり俺に話をふるな……まあ、混ぜりたいなら素直に言えよ」

「なっ！？……くっ、まっ混ぜてください……」

「ふふ、正直で良い……仕方ないハエにたかられた肉だが混ぜてやるっ」

「ぐくっ……見てらっしやい……」

星奈の目に今までないほどの怒りを（まだ会って1日しかたっていけど）見たが、面白くなりそうだからスルーしておいた。

月曜日

放課後に隣人部部員4人が集まった。

「全員、ちゃんと持って来たなモン狩！」

「」「」おお」「」

「じゃあ、まず最初にをホストを決めないといけないな……ハンターレベルが一番高い奴で良いか……じゃあまず小鷹は？」

「俺は1だ、まだやったばかりだから……」

「ふん、そうか……優作は？」

「俺は4だな……じっくりやってたから」

俺はこういったゲームはマップの隅々を調べてから進むから進行が遅いのだ。

「うむ、やはり前から持っていた奴には負けるな……私は3だ」

「3か……なかなかやり込んでるな……星奈は？」

「肉のことだ低いだろう……」

「あたしは5」

髪をかき上げながら星奈がさらりと、しかし微妙に優越しながらかつ得意げに言った。

「ほづ、そうからか……なに、5だと!!」

「最高レベルだな……」

「ふふ、星奈よ……なかなかやるな」

このゲームで最高レベルの5になるには、最低でも数十時間は必要となる。

それをやってのけたのだ、やっぱり面白い奴。

「あっはは、私を見くびってもらったら困るわね!」

星奈の目元を見てみると、化粧で隠してあるがつつすらとクマが見えた。

「くっ、しょうもない事で意地張って……まあいい肉、お前がホストだ」

「あっはは、リーダーの私の後についてきなさい!!」

「いや、正確にはリーダーじゃ無いと思うが……」

小鷹がツツコミ入れてたがスルーされていた。

哀れだな小鷹。

星奈のPSPに接続して、ゲームが始まった。

ゲームが起動して最初のスタート地点に俺達四人のキャラが立った。

「小鷹キャラ……お前の理想か？」

「う、うるさい別に良いだろ……お前のキャラは……」

小鷹がPSP内の俺のキャラを見て固まった。

名前【ケン？ロウ】

顔：ケ？シロウ

髪：ス？パーサイヤ人

服：世紀末伝説な服

ズボン：孫？空のズボン

武器：か？はめ波

「待てい！！！」

「なんだ小鷹？」

「なんだじゃねえよなんだこの伏せ字ばかりの装備は！！！」

「ん？手に入ったから」

「手にはいるの！？こんな装備が手に入るの！？てか武器がかめ？め波ってなに！？」

「そりゃこんな風に……」

「かめ？め波！！！」

ゲームの中のキャラがかめ？め波を打ち出した。

「ほらな」

「……突っ込んだら負けだなこれ」

「ともかく行くぞ……お前がゆるゆる突っ込んでいるうちに星奈と夜空が意味の無い争いを始めてるし」

二人が話しているうちに星奈と夜空の二人はゲームの進行上全くもって意味の無いキャラ同士で殺し合いを始めていた。

「……二人で行くか」

「それしかないな」

残りの二人はモン狩を楽しむ事にした。

「うん、なかなか楽しかったな……」

「ああ、久しぶりにモン狩でワクワクした」

下校時刻になって、楽しいモン狩と不毛な戦いは終わりを告げた。

別に気になっていない戦績だが、どうやら夜空の方が勝つたらしい。

だが、貴重なアイテムを夜空の方は使い切ってしまったので、もう少し時間があったら星奈が勝つただろうな……

下校時刻になるとその二人はさっさと帰ってしまったので、後片付けなどは俺達がやって今二人で帰っている。

「また、二人でやりたいな」



「ああ、やればやるほどハマっていくな」

「ああ、ハマるな……あ、俺こっちだから」

「おう、またな」

そうして隣人部のゲーム大会は終わった。

ちなみにこれから後日談になるのだが、どうやら帰り道での話が他にも聞こえていたようで、噂になっていた。

噂に聞き耳をたててみると、どうやら話の意味を取り違えたようで、『不良二人が悪巧みを相談していた』となっていた。

しかし何故だ……俺達が不良に見えるからか！

……泣いて良いですか？

## モン狩(後書き)

9月に出るはがないの新刊楽しみです。

## 美少女ゲーム（前書き）

原作のギャルゲーの世界によつてこそです。

## 美少女ゲーム

モン狩を隣人部でやって数日後、俺が少し遅れて部室にやってくる  
と中が少しうるさかった。

「ふん、だったらさっさと開けて準備しろまったく使えない肉だな」

「すまん遅れた……えっ、何で部室にテレビとゲーム機が？」

「優作、遅い！……肉が持ってきたのだ」

「テレビゲームか……なんてゲームだ？」

「ときメモ7……だっけ」

小鷹が答えた。

「おお、名作ときメモシリーズの最新作じゃねえか！……なかなかいいやつ選ぶじゃねえか！……俺はもう全キャラ三回やったぞ！……」

「あんた……テンション高いわね、てかプレイ済みなのね……」

俺は、エロゲーだけではなくもちろん美少女ゲームもやる。

名作と言われるのももちろん、その他のゲームもプレイ済みだ。

「次やるなら、そうだな……まずはk? y作品からやると良いぞ！」

「k? y作品? なにそれ？」

「ゲーム製作会社だよ!! 泣きゲー大分作ってるぜ」

「泣きゲーとはなんだ？」

夜空が話に入ってきた。

「単純に言えば、泣けるゲームだなk? y作品は泣きゲーが多いんだk a? non、A? r、CLA? NAD、リ? バスとかな泣きゲーの名作だ……名作つながりで言えば山田? 3部作の加? と家族? 画他にも……」

「はいはい、その辺で黙りなさい」



「オープニングムービーはな、どんなゲームでも重要だろおおお  
おがああああー!!」

「なっ、なによ」

「特に美少女ゲームとかはな!!オープニングムービーに伏線があ  
ったりすんだぞおおおおおおおお」

「別に、良いんじゃないのよ!!」

「俺の前でやるんだから口出しさせてもらっ!!」

「……分かったわよ!!」

星奈はゲームを起動し直して、最初から見直し始めた。

「……あいつの前ではもうこの話題を出さないようにした方がいい  
な」

「……同感だ夜空」

後ろで2人が何か言っていたがとりあえずスルーしておいた。

オープニングムービーを見終え、名前の入力画面になった。

「名前……」

「お前のゲームだ、お前の名前を入れればいいだろう」

「じゃあ……か、柏……崎……星……奈っと」

名前を入力し終わるとスタートボタンを押してゲームが始まった。

「ここから先はさすがに口出しするような事はしないから、自由にやって行け」

「ようつやく自由にやっていけるわね」

「ちつさと進める肉！」



俺は小鷹の横に行き、変わりに夜空が星奈の横に移った。

「お前……ホント美少女ゲーム好きなんだな……はつきり分かったよ今」

「おう、好きに決まってるだろ。俺の人生そのものだ!!」

「そこまでかよー!!」

「ああ」

そんなこんな話していたら、ゲームは最初の選択肢の所になっていた。

1・「こちらこそよろしくね!あかりちゃん」

2・「ああ、よろしく藤林さん」

3・「……馴れ馴れしい女だな。消えろ」

「おお、藤林さんじゃないか」

「真面目そうでいい娘みたいだな」

藤林さんのモデルって誰何だろうか……藤？涼かな……

「ああ、普通は1だな2でも良いけど3を選ぶ奴は……」

「3ね」「3だ」

居ましたよここに……

「何で3だよ!!」

「ハア？入学初日にいきなり知らない男に声をかけて来るような女が信用出来るわけ無いじゃない、それにあんたには口出ししないんじゃないの？」

「くっ！？分かった……」

俺は渋々下がった。

「すまねえ藤林さん……」

「それじゃ、3で決定でいいわね」

そう言っつて星奈は3を選んだ。

途端に藤林さんが悲しそうな顔をした。

【「ごめんね、柏崎くん……たしかに初対面なのにちょっと馴れ馴れしかったかも……」】

かわいそうなくらい落ち込んだ様子で藤林さんは去っていった。

「ぬああああああああすまねええええええええええ藤林さあああああああん……！」

「うるさい優作……！」

「ど、どんまい優作……！」

「くううう……！」

俺はしばらく意気消沈していた。

次の時、俺が意識を取り戻すとゲームは図書館で選択肢が出ていた。

「……………おお！長田有希子じゃないか！！」

「お、復活したな優作」

「ああ、何とかな……………」

長田有希子のモデルは絶対長門？希ですよな。

あと長門は俺の嫁！！

選択肢

1・「こつちこそごめん」と彼女に本を譲る

2・「この本は僕が先に手に取ったんだ！」と遠慮なく本を持って行く

「おい！！空気を読んでくれよ……」

そう願うと2人は1を選んだ。

「よっ、良かった……」

「本なんて読んでる暇あつたら勉強しろ星奈」

「次のテストまでに学力200目指してるんだからね！」

……ちよつと違う理由だったがまあ良かった。

会話をして長田有希子をデートに誘えるようになった。

「んーとりあえずこの子と友達になってみようと思っけど文句ないわね？」

目的は友達じゃなくて恋人だけだな……

「ビッチの藤林あかりよりははるかにマシか。まあいいだろう」

「藤林さんはビッチじゃねえ!!」

「うるさいぞ優作!!」

「くっ……あ!!」

「どうしたんだ優作?」

「図書館で思い出した、図書室で借りてた本今日までに返さないと行けないんだつた!!」

「なら早く返して来い!読書家としてな」

「ああ、ちよっくら行って来る」

俺はカバンから本を取り出して本を返しに向かった。

図書室に行く途中、何人かの生徒と会ったが皆、俺の姿を見ると横にはけて道を譲って来た。

……もう慣れたよ!!

ちよっくらとか行ったが、図書の先生探すのに手間取り少し時間がかかって部室に戻った。

戻ってみると中から泣き声が聞こえてきた。

「どっ、どうしたんだ？」

「ああ、優作お帰りゲームがバッドエンドになっちまって……」

「はあ!!もしかして藤林さんに一度も謝らなかったのか？」

「ああ、そればかりかひどい言葉を延々選び続けた……」

「……そりゃバッドエンドになるわな……」

「ぐすっ……有希子……信じてたのに……っ」

どうやら星奈はよっぽど有希子を気に入ったようだな……藤林さんの気に入って欲しかった。

「……藤林あかり……ブチ殺す……」

「藤林さんは悪くねえよ!!」

夜空はゆらゆらとドス黒いオーラを出して部屋から出て行った。

夜空も夜空で気に入ったようだったな有希子のこと……しかし藤林さんは悪く無いぞ

その日の部活はこうして終わった。

この晩、俺が藤林さんルートと有希子ルートをやり直そうと思った事は、多分説明しなくても分かるだろう。

翌日

「……っと言いながらなんだかんだ全員やってしまった」



「徹夜で全員やったのかよ……」

「ああ、あれじゃやらないわけにはいかないからな……」

俺は部室に向かいながら小鷹と話していた。

「はいこれ」

部室に入ると中に居た星奈が小鷹に寄って何かを突きだしていた。

よくみると昨日プレイしたときメモだった。

「貸してあげるからやりなさい!!」

次に俺の方を向いて話し始めた。

「私間違ってたわ……あかりはいい子ね!」

「どづいっ風の吹き回しだ……」

っとよくみると目にくまが出来ていた。

「ひょっとして……全員徹夜でやったのか？」

「うん！しかしいいゲームね、2人も他にもアイナも美帆も菜摘も観月も可憐もホントいい子ね……」

「ああ……そうだろ……」

2日間の成果

星奈が俺側の趣味の人になった。

育て甲斐がありそうだ。

## 美少女ゲーム（後書き）

作中に例として出したゲームの中で持っているのは、CLANNA  
Dだけです。

他に持っているのはこんにやく（この青空に約束を―）で、借りて  
やった事があるのはD、C?です。

作中に出したゲームは全部やりたいです。

はじめてのおかいもの(前書き)

前話から1ヶ月ほど開いてしまいました。  
すみせん??

この話はオリジナルな話です。

はじめてのおかいもの

星奈が俺側の趣味（美少女ゲームなど）にハマった数日後の金曜日、  
下校しようとして部室から出た時後ろから声をかけられた。

「優作、ちょっといい？」

「ん？何だ星奈？」

「ちょっと話があるのよ」

「話？まあ良いけど……小鷹、すまんが先に下校していてくれ」

「ああ、分かった」

「すまん」

「話をするのは良いが、別の所で話せ！！私は静かに本が読みたい  
のだ！肉の声を聞きながら本を読みたくない！」

「夜空あ……でも、確かに本読む時は静かにして欲しい気持ちは分

「かるわね……別の所で話しましょうか」

「今日は珍しく気が利くな肉」

「……行くわよ優作!!」

「ああ」

俺は星奈のあとについて行った。

「で、要件はなんだ？」

隣人部の部室から少し離れた所で星奈の要件を聞く事にした。

「いや……さ、前にあんた言ったゲームが気になって来てね……」

「……ああ、k？y作品か、あれがどうした？」

「そうそれが、で気になって探してみたら美少女ゲームの所に無いのよー！」

ああ、なるほどねPSP版が売って無いから売って場所教えろってことね。

「あれ？でもkey作品って名作だから普通に置いてないか？PSP版とか」

「私が欲しいのはPC版よ」

「ああ、PC版か……ってPC版ー！」

「だって元はアダルトゲームでPCから出たんでしょ？」

この人は自分が言っている意味が分かっているのでしょうか？  
アダルトゲームと言ったら……ね  
確かにCLANNAD以外はそうだけど……

「ああ……も、もしかしてお前、アダルトゲームの意味分かってない？」

「あんたの言ったやつ調べてみたらCLA？NAD以外みんなアダルトゲームじゃない。泣きゲーって言うってから大人でも楽しめるゲームって事じゃないの？」

どうやらこいつは本当にアダルトゲームの意味が分かっていないようだ。

説明するしかないのか……

「はあ、不幸だ……」

つい、某目録の主人公の口癖が出てしまった。

恥ずかしいが仕方がないので俺はアダルトゲームの説明をした。

女子にアダルトゲームの説明なんてホント不幸だ……

「……っというゲームだ分かったか？」

「……へっ、へえそ、そんなゲームなのね……」

俺の説明を聞いた星奈は真っ赤な顔をして動揺しながら、さも動揺にしていないうちに見せた……いやバレバレだからね星奈。



「で、どんなゲームが分かったところで買いに行くのか？」

「ふえっ！？か、買うに決まってるじゃないの！！」

「そうかい、じゃあいつ買いに行く？」

「そうね……明日！」

「明日か……待ち合わせはどこにする？」

「とりあえず遠夜駅にしましょう、遠夜駅に10時待ち合わせね」

「ああ、分かった10時な」

「うん、じゃそういっことで」

話終わると星奈はさっさと帰って行った。

明日、遠夜駅に10時。

忘れないようにしておかないとな……

「まあとりあえず帰るか……」

話も終わったので俺もさっさと帰る事にした。

翌日

遠夜駅 AM 9 : 5 5

待ち合わせ時間の五分前に行くと共に星奈が待っていた。

「遅い！私を待たせる何ていい度胸ね……」

「約束は10時だろ、5分前に来たから良いだろ……」

「それでも、女の子は待たせたらだめでしょ……！」

「……一理あるな、これからは注意するよ」

「分かれば良いのよ、とにかく売ってる場所を教えなさい……！」

「はいはい、じゃあ早速行くか……」

俺は星奈と一緒にアダルトゲーム（改めて考えて何で女子と買いに行くんだろう俺……）を買いに向かった。

「ほい、ついたぞ」

「ここに売ってるの？」

遠夜駅から電車に乗り2駅の所で降り徒歩10分の所にある店に俺は星奈を連れてきた。

「お前、中古嫌だろっ？」

「そっね、中古は嫌ね新品が良いわ」

「だろうと思ってここに来た、ここは5年前までのPCゲームはほぼ新品が買えるすごい店だ……いわく付きだけだな」

「いわく付き？」

「それは気にしない方が身のためだ」

「まあ良いわ行きましょうか!」

「ああ、そうだな……」

星奈が先頭に店の中に入った、2人しか居ないけど……

「おお、結構広いわね」

「意外とな、お前の欲しいゲームはこっちだ……」

「うんうん、早く早く」

入口から中に進み店の一番右奥まで星奈を連れて行った。

「ほい、ここだ」

そこに泣きゲーの名作集が置かれている。

「おお、?annonに?irにCLA?NADに、智アフまで、

すういわ「ユートピアね……」

「店の名前も『utopia』だからな……そういやいくら持って来た？」

「1万円持って来たわよ」

「1万か……まあ1つ選んでみるや」

「うん、そくねえ……あれ何このゲーム？」

「ん？」

星奈が見ている先を見ると、1人の少女がパッケージされているゲームが置かれていた。

「ああ、沙？の唄か結構古いゲームだな……これが気になるのか？」

「なんだかこの子にすごく惹かれるわ……よし！これにするわ！！」

「ええ、k？y作品は良いのか？」

「確かにkey作品は迷ったわ、でも今私はこのゲームがとても気になっているの!!!店も分かったしまた買いに来るわ!!!」

「……まあお前がいいなら問題無いけどな」

こうして星奈が一番最初に買ったアダルトゲームは沙?の唄となった。

しかし、?耶の唄か……あの世界観女子の星奈に耐えきれるかな……まあいいや

その後は遠夜駅で星奈と別れて1日は終わった。

日曜日を挟んで月曜日、いつものように部室に行くと星奈が待っていた。

「おう、どうだった沙?の唄?」

「うん、良いゲームだったわね……まず最初にあの世界観に驚いて

止めようかと思って、頑張つてやったら2人とも死んじゃつてあの時も止めようかと思つたけど、あのエンドは泣けるわね、私の涙腺が崩壊したわ……」

どうやらすごく楽しんだようだ。

？ 耶の唄か、もう一回やり直そうかな……

そんな事をふと思った月曜日だった。

はじめてのおかいもの（後書き）

沙耶の唄を買わせたのは勢いです。

沙耶の唄もプレイしてみたいゲームの一つです。



## 舎弟と弟子

ある日の放課後、部室で隣人部メンバーがゆっくりダラダラ過ごしている。

「なんか最近、誰かに見られている気がするんだよね……」

小鷹が深刻そうな顔でぼつりと呟いた。

「ふっ……」

一番最初に反応したのは夜空で、なにか可哀想なものでも見るかのような目を小鷹に向けて嘆息した。

「へえ……」

次が俺でとりあえず相槌だけ打っておいた。

「はっ」

最後が星奈でめちゃうちゃバカにした感じで笑った。

「く……」

半ば予想通りの反応されて、悔しそうな顔を小鷹はしていた。

「小鷹……それは気のせいじゃあ無いのか？」

「本当のこと何だよ！！」

「そうか。それならば本当なのだろう」

小鷹が無然とした顔で食い下がると、夜空はあっさり認めたようだった。

「夜空……小鷹の妄言を信じるのか？」

「妄言言っな！！」

「ああ、信じよう。小鷹が『誰かに見られている気がする』のが本当だと」

どうやら全然信じていなかったようだ。

「…トイレの時とか、飯食っているときとか、学校の色んな場所で妙な視線を感じるんだ」

「それは単にあんたを警戒しているんじゃないの？」

星奈の推測を小鷹はすぐ否定した。

「違う、そういう視線は慣れてるから分かる。なあ、優作？」

「いきなり俺に話を振るな！……まあ、そういう視線はもう分かるな」

「悲しい生活ね、あんたら」

「」「」「つるせえよ」

改めて言わないでくれ……泣きたくなってくる。

「じゃあ、その視線はどんな視線なのだ？」

「うーん……何というか、俺を観察しているような視線だな、こっちが目を向けると消えるんだけど、目を逸らすとまた視線を感じるんだ」

「小鷹、貞子的なものに憑かれているんじゃないか」

「何で!?!」

「あれだよあれ、昔の死んだスケ番なんかがお前を見てヤンキーと勘違いして」

「ちげえよ！憑かれてたまるかよ！スケ番なんか憑かれてたまるか!！」 「じゃあ誰なのだ、お前を好き好んで観察している奴は？」

「む……それは……」

夜空に突っ込まれて、言葉に詰まった小鷹は少し間を開けてから意を決したように言った。

「……あれだよ……その…………ストーリー……」



「小鷹……心が疲れているんなら良いカウンセラー知ってるぞ」

続いて俺、本当良いカウンセラーだからさ教えるからさ。

「……」

最後が夜空で無言で立ち上がると、カップにコーヒーを入れて小鷹の前に置き、優しく微笑んだ。

「ほら、冷めないうちに飲め、小鷹」

「や、やめるよ……急に優しくするなよ……」

「……さすが夜空だな、ストレートに笑われるより精神的にくる攻撃を仕掛けとは……」

「褒めるな優作」

「いや、褒めてないでしょ……」

珍しく星奈がツッコミを入れた。

「ああもう、確かにいきなりストーカー認定は行き過ぎたよ、言葉を弾ませ過ぎたよ!」

小鷹はもうムキになって言う。

「でももしかしたらあるかも知れないだろうが!俺に好意を向けてくれる人が!」

「……まあ、CLA? NADの岡?は不良だけど元々モテたけどな……坂上智?とか藤?杏とかに色んな人に……元々めっちゃイケメンだったけど……」

「確かに?也はそうだけど、小鷹はねえ……」

「くっ、もういい。お前らに相談した俺が馬鹿だった」

ああああ、どうやら小鷹を怒らせてしまったようだ。

小鷹は無然として席を立った。

「待つのだ小鷹」

夜空が呼び止めた。

「同じ部の仲間が困っているのを放っておけない。そのストーカーを捕まれるのに協力してやろう」「別にそんなに困ってないし多分ストーカーじゃないんだけど」

「ストーカーじゃなくても、気になってるなら手伝っぜ」

「だって休み時間暇だから」

おいおい夜空、部員が心配じゃなくて暇つぶしかよ出任せでもそんな事言っとけよ。

「……ふん、夜空がやるならあたしも手伝ってあげるわ。あたしは暇じゃないけどね」

夜空に張り合って星奈も協力を申し出た。

小鷹の顔を見てみると、また何か厄介な事に巻き込まれそうだなと後悔しているような顔だった。



翌朝

いつも通りに俺が登校すると、夜空と星奈が校門に居た。朝に弱いのか心なしか2人とも機嫌が悪そうだ。

「おはようさん、2人とも……なにしてんだ朝から？」

「ん？……なんだ優作か、小鷹を待って居るのだ」

「小鷹を？」

「あんた忘れたの？小鷹のストーカー探しを手伝う事になったじゃない」

「ああ、そうだけど。話聞いた感じだと学校生活中に見られているっばいから、まあホームルームが終わった後ぐらいに手伝ってやるうかかって」

「「な……!?!」」

俺が言つと2人は顔を引きつらせた。

「確かにそつだ……」

「くつ、時間を損したわ……」

なんだかんだ言つて小鷹の事心配してやってるんだな……っと思つた朝の会話。

クラスのホームルームが終わつた後俺は小鷹の教室へ向かつた。

部屋に行く時とかは別々だし、怖がられるから別の教室には行かないようにしていたから、小鷹の教室に行くのは初めてだな。

行く途中で星奈に会い、一緒に向かつた。

俺達2人が教室に入ると、少しざわめきが起きた。

「それじゃ行くわよ」

「行くぞ小鷹」

「ああ」

「命令するな肉」

2人と合流し、とりあえず目的があるわけではないが、授業が始まるまで適当にぶらつくことにした。

「……………ふむ……………確かに妙な視線は感じるな」

廊下を歩きながら夜空が小声で言った。

「ええ……………小鷹の妄想じゃなかったのね」

真剣な顔で頷く星奈。

「いや、この視線は……………」

「……………確かに視線は感じるけど……………普通の生徒からもめっちゃくちゃ注目されてるんだよ……………」

「「あ……」」

現在の配置、小鷹が先頭右が夜空、左が星奈、最後が俺。

あぶれ者の不良（に見える小鷹）黒髪美人の夜空、金髪碧眼の美少女星奈、巨体でヤクザにしか見えない俺。

ただでさえ1人でも目立つ人間が4人一緒に歩いていたら、そりゃ注目されるに決まっている。

それになんか怨念が混じった視線がある。

「もう。これじゃクラスの男子共を追い払ってまで協力した意味が無いじゃない！」

「……それが原因だな」

「……終わりにするぞ」

「それがいいな」

そこでストーカー探しは終わった。

放課後

小鷹が今度は1人で探してみると言ったので、1人にして俺らは足先に部室に行った。

部室でゆっくりしていると、小鷹が女の子？を連れてきた。

「……楠幸村……なんか戦国武将みたいな名前ね」

「おまじです」

星奈の言葉に幸村と名乗った女の子？は頷いた。

「真田幸村のごときりっぱなにつぼんだんじになるまじごとじ、父上と母上のねがいが込められた名前なのです」

「ん？……日本……男児？」

「大和撫子じゃなくて？」

俺と夜空は眉をひそめた。

「……あの。あんまり考えないようにしてたけど……まさかお前、男なのか？」

小鷹がおそろおそろ尋ねると、幸村はぽーっとした無表情で首を傾げた。

「みてのとおり、わたくしはだんしですが？」

「……いや、見て通りじゃないから」

「これが性別秀吉か……初めて見たな……」

「？」

不思議そうに幸村はまた首を傾げた。

「……そういや何で小鷹をつけ回していたんだ？」

俺が尋ね、当事者の小鷹、夜空と星奈も幸村に注目した。

幸村は相変わらずの無表情で淡々と言った。

「じつはわたくし、いじめをうけているのです」

「いじめか……やっぱりあるんだなこの学校にも」

「当たり前だろう。いじめがない学校など存在しない」

平然と夜空は断言した。

……まあそうか、いじめがないところなんてそう無いもんな。

「そ、それがどうして小鷹をつけ回す事になるの？」

深刻な空気になるのを嫌ったか、星奈が慌てた様子で幸村に尋ねた。

「どうすれば小鷹せんぱいのようにつよくてかっこいいおとこになれるか、学ぼうと思ったです」

「っ、強かつこいい……!?!」

「小鷹がね……まあ人の見方の自由だ」

「あの……ちょっとひどくない？」

「まあ、とりあえず強い男になったらいじめられない……そういう分けだな？」

「そのとおりです」

「無視かよ！」

小鷹はスルーされた。

……てかカバーしてやれよ幸村。

「いじめにあつてると言ったが、どんないじめにあっているんだ？  
酷いようなら先生とかに相談した方がいいけど……」

本題に入る事にした。

いじめがあまりに酷かったら、一発しめてやるのかな……



「ぐたいてきには同じがくねんのだんしがわたくしをむしするので  
す」

淡々と言う幸村。

「仲間はずれ？」

「はい、たとえばたいくの時間のまえきがえよつとするとまわりに  
いた人がはなれてゆきます」

「……ふむふむ」

「いっしょにあそんでいて汗をかいたので服を脱ごうとしたら、急  
にみんないなくなってしまうたり」

「……ふむふむ……ん？」

「ほかにはどっじほーるのときにわたくしだけねらわれなかったり」

「……………」

「ほかの人たちがつれしょんに行くというのでわたくしもいつしよに行きたいといったら断られてしまったり……………などです」

……………それ、いじめじゃないです。

幸村が女の子っぽいからどう接したら分からないからだと思います

……………ある意味いじめかこれ？

「なあ、それっていじめじゃな……………いてっ」

小鷹がその事を言おうとしたら夜空に頭をはたかれた。

「うんうん。それは可哀想だな。同情のあまりもらい泣きしてしま  
いそうだ」微塵も同情した様子などなく淡々と夜空が言う。

「はい。先日ゆうきをだしてなぜわたくしを仲間はずれにするのか  
ちよくせつたずねたところ、わたくしがおんなみたいだからと顔を  
真っ赤にしておこりながらいわれました」

純情なクラスメート男子だな……多分めちゃくちゃ恥ずかしかった  
だろうな。

「つまりわたくしが女々しいからこのようなしうちをつけるのです。  
ゆえにわたくしがおとこらしくなれば、きっといじめもなくなるに  
違いないのです」

「……まあ、男らしくなったらそんな目には合わないだろうな」

骨格とかから変えればだけどな……

「楠幸村。自らの力で困難に立ち向かうその姿勢、見事だ。小鷹の  
もとでしっかり男子の道を学ぶがいい」

「おい!?!」

「ありがとうございます。しかとまなばせていただきます」

「小鷹……諦める。夜空とこいつはどつやっても止まらないぞ」

納得の行っていないような小鷹に俺はそう言った。

「では、この入部届けに名前を書くのだ」

「はい。書きます」

さらさらさらー……

夜空が手渡した入部届けに、優美な文字で楠幸村の名前が書き込まれていく。

小鷹の方を見ると夜空と言い争いのような事をしていた。

「女みたいな文字書くな……」

「わたくしはにっぽんだんじです」

「分かってるよ……ちなみにお前剣道とか合気道に興味ある？」

「けんごうにあいきごう……」つぼんだんじならならつづきものです」

「教えて欲しかったら俺に言ってくれ、いつでも教えるぜ」

「なんと……ししうとおよびしても……え」と

「あ、優作だ仲里優作」

「優作ししう?」

「俺の教えは厳しいからな」

「はい」

その後、幸村は夜空の言った言葉によって小鷹の舎弟となった。

……舎弟ってヤクザかよ  
本日の成果

俺に弟子が小鷹に舎弟が出来た。

次の日の昼休み

何気なく小鷹と一緒に昼飯でも食ってみようかなと思って歩いてい  
ると後ろから声をかけられた。

「ししゅう」

「ん？……幸村かどうした？」

「あにきにおしよくじとやんきー漫画をおわたしに」

幸村の手元を見てみるとやんきー漫画やカレーパンなどのヤンキ  
ーが好きそうなものが揃っていた。

「誰に言われたんだ？」

「よぞらのあねごにいわれました。では失礼いたします」

幸村はそう言って歩いて行った。

「……部室で食べよ」

なんだか幸村と一緒に教室に入るのがイヤになったからいつも通り

に部屋になった。

舎弟と弟子（後書き）

はがないの七巻買えなかったのが悲しい……



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9445u/>

---

俺は友達が出来ない!!!

2011年9月28日19時16分発行